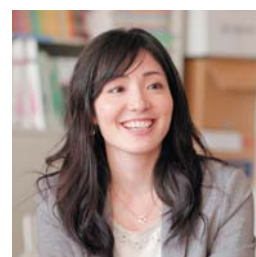


英語の授業に「実社会」や「他教科」を巻き込み 知りたい! 学びたい! やってみたい! 心に火をつける

今回の事例は一見私立の進学校だからできることのように、その本質は、実はどの学校でも再現可能なもののように思います。そこでかぎを握るのは「巻き込んでいく先生」の存在かもしれません。そんなことを考えさせられた実践をご紹介します。

取材・文/松井大助
撮影/平山隼



英語
菅家万里江先生

非常勤講師を経て2012年に渋谷教育学園渋谷中学高校の教員に。2014年に同校のSGH指定を受けて、SGH担当の一人として、北原先生たちと共にカリキュラムづくりを進める。東京外国語大学などから留学生を招いて授業を行うなど、学校外にあるリソースを活用することにも力を入れている。

「話したい」「聞きたい」から
英語を学びたくなる

インドネシア人留学生のムスリム(イスラム教徒)の青年が、渋谷教育学園渋谷中学高校の生徒の前で「礼拝」をしてくれるという。英語の授業の講演会。「アイドルの通訳もしたよ」と話す気さくな青年だったので、生徒たちはリラックスしてざわざわしながら彼を取り囲んだ。

だが彼が真剣に聖典を唱え、頭を床につけるおじぎを真剣にくり返すと、空気は変化した。室内は静まりかえり、生徒たちは微動だにせず彼を見つめた。講演会には日本人のムスリムの男性も来てくれていて、事前に「礼拝は心のごはん。心にエネルギーを取っているんだよ」と解説してくれた。百聞は一見にしかず。聞くだけではわからない、イスラム教の暮らしの息づかいに、生徒たちはふれた。

続いて英語での質疑応答。この段階で多くの生徒がもどかしさを味わう。質問したい。彼らの回答をよく理解したい。英語がもつてきたら、それができるのに。

2年生は英語の授業で、イスラム教やフランスの出版社襲撃事件に関する英文も読んできた。出版社はイスラム教を侮辱するような風刺漫画を週刊誌に度々掲載した。その出版社をイスラム過激派が襲い、編集長や漫画担当者を殺害した。事件を欧米やイスラム圏はどう報じたか。

そのリーディングや講演会での学びをもとに、最後はロールプレイ(役割演技)



リーディングは生徒がペアやグループで学び合い、その後レベル別クラスでフォローアップする(58pのHINT&TIPS参照)

のイベントを行った。フランス政府、出版社、イスラム教徒の役に生徒が分かれて、主張し合うのだ。議論は英語で行う。発言したくても、相手の意見に耳を傾けたくても、日本語のようにはいかに、生徒は再びもどかしさを味わった。

英語の授業に生かせるから
世界史への関心が強まる

2年生はちょうどこの時期に、世界史の授業でもイスラム文明を学んでいた。ここで少しでも理解を深めておけば、英語の授業の講演会やイベントにも生かせるのだから、生徒の目の色も変わる。実際、講演会やイベントには、世界史のノートや資料を持ち込み、学んだことをもとに発言していた生徒がいた。

そもそもこの時期に英語でイスラム教にかかわる現代のトピックスを扱ったのは、菅家先生たち英語科の先生が、授業のテ



Social Justiceのプレゼン。社会問題について調べたり行動したりすることは主に授業外で行い、授業は発信の場として使う。

「マを世界史と意図的に合わせたからだ。」「英語のリーディングの授業では、教科書を使っていないんです。地理、家庭科、世界史、国語、生物など他教科の学習内容と重なるテーマ、水・エネルギー・宗教・環境について、実社会のホットな話題をみつけて、その話題をもとに自分たちでテキストを作っています。イスラムの問題に関するテキストは、夏目先生が作ってくれました(NTTP/INM参照)」

その授業のまとめに入る前に、予想だにせず、死者約130名を出すパリ同時多発テロが発生した。直後から、イスラム過激派と混同すべきでないイスラム教徒への嫌がらせも続出した。菅家先生たちは急遽教材テキストを変更し、この問題を報じた英文レポートを授業で使った。

でも生徒に考えてもらうことは当初の予定と変えていない。日本でも顕在化してきた、イスラム教や外国へのphobia(異常なほどの恐怖や嫌悪)について。

INTERVIEW

知恵の集結や共存の模索を体験してほしい 自分たちのそんな思いが授業になった

北原：教科連携は前から構想していたんです。本校はユネスコスクール認定校として、ESD (Education for Sustainable Development)に取り組んでいます。ESDでは、地球社会の課題を解決していけるような「考え方」の育成を目指しますが、地球課題は1教科や1専門分野では解決できず、知恵を出し合うことが求められます。その重要性を生徒に体験させたい、というのがもともとあり、SGH(Super Global High School)の取り組みに合わせて、本格的な形にしよう、となったのです。

本校の学習計画を調べると、水・エネルギー・宗教・環境についてはいろいろな教科が扱っていました。そこで、私がSGH担当として各教科の先生と相談し、同じテーマを学ぶ時期が重なるように調整し、英語テキストはテーマごとにわれわれで1から作ることにしました。どんなテーマでも情報収集・発信に使える英語は、教科連携の扇子の要になれる、と思っています。

夏目：そのテーマのなかで、私は宗教をぜひやりたかったです。私は以前にシンガポールに住んでいて、そのときにイスラム教の友人もたくさんできたのですが、9.11のテロのあとで、その人たちが嫌な思いをしました。生徒には異なる宗教と共存する未来をどう創るか、考えてほしかったのです。

テキストは欧米や中東の報道を追いかけて、それらを活用して作りました。当事者と話す機会を教育場面に組み込むことも大事にしているので、都内にあるモスクに向かい授業の協力を依頼し、打ち合わせを重ねました。準備には時間がかかりましたが、手ごたえはありました。最後のIslamophobiaの授業では、クラス全員、76の瞳が食いついてくる感じがありました。



SGH委員副委員長
ユネスコスクール担当
北原隆志先生
国際部長
夏目洋子先生

授業の最後に、菅家先生は、2050年にはイスラム教徒が地球人口の30%を占めるほど世界中に広がる予測データがあることを示しながら、生徒に投げかけた。

「How do you adapt to that change?」

「How do you make a difference in the society?」

「その社会の変化に君たちはどう対応し、社会の変化をどう創りだしていくの?」

**考えて発表するだけでなく
社会に働きかけて検証する**

こうした学習と並行して、2年生の英語の授業では、生徒が1年間かけて行うプロジェクトも同時に走らせている。

Social Justiceというプロジェクトだ。まずは生徒が2、3人で自分が好きな社会問題をみつける。その解決策を、さまざまな教科で学んだことを生かしながら考える。そのうえで毎授業の冒頭に、順番に1分間ずつ英語でプレゼンする。

実はここまでは以前から授業で行っていたが、菅家先生が「すくいい取り組みなので、さらに学びを深めたい」と考え、昨年度より一層パワーアップさせた。

プレゼンしたことを踏まえ、今度は生徒が、個人でもグループでもよいので、社会問題の解決のために「実行に移せるプラン」を考える。そして夏休みや学園祭を活用してやってみる。最後にその結果を検証して英文レポートを提出する。

そのように、生徒が実際に社会に働き

かける活動になったのだ。ある男子は、夏休みに海底のゴミ拾いに挑戦した。ある女子は、ホームレス支援の炊き出しに参加した。楽器ができるメンバーで集まり、学園祭で、子ども向けの曲の演奏と、児童虐待防止の啓蒙活動を合わせたコンサートを開いたグループもあった。

「生徒たちは『こうしたらこうなるから』と先ばかり読みすぎるところがあるんです。そうではなく、興味をもったらまず取り組んでみて『そこから考えればいい』という、楽観的でメンタルタフネスでもある、そんな実行力も身につけてほしいのです。そうして、国境や学問の分野などいろいろな壁を自ら取り払って、イノベーションを起こせる人が増えたら、世の中はもっとおもしろくなる、と思うんです」

渋谷教育学園渋谷中学校(東京・私立)

School Data

普通科/1996年創立
生徒数(2015年度)620人(男子271人・女子349人)
進路状況(2014年度実績)
海外の大学8人・国内の大学145人・専門学校1人
就職1人・その他57人
東京都渋谷区渋谷1-21-18
TEL 03-3400-6363
URL <https://www.shibuya-shibuya-jh.ed.jp/>

Outline

都心にある中高一貫校で、目指しているのは国際社会で活躍できる人間の育成。自らの手で調べ、自らの頭で考える「自調自考」の力を伸ばすこと、「国際人としての資質」を養うこと、「高い倫理観」を育てること、という3つの教育目標を掲げている。生徒のなかには海外生活経験がある帰国生も多数いる。2014年、グローバルリーダーを育成する高校として、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受ける。



菅家先生たちは、先生同士の話し合いで授業を組み立て、ブラッシュアップさせている。北原先生、夏目先生、大平佑有子先生との話し合いの様子をダイジェストで紹介したい。

- 北原**：3学期の授業だけど、生物と国語が地球環境のことをやるから、英語もそれと関連させたのやりたいんだよね。
- 夏目**：教材用の本にWORLD HAPPINESSの話があるのだけど、「持つほど幸せか」という視点からつなげられるかなあ。
- 大平**：そこで生徒に「あなたの幸せは」も書かせたらどうですか。
- 夏目**：それ、前にやったらおもしろくて。その記録も使えるかも。
- 北原**：いいね、ひとつはそれを柱にしよう。
- 菅家**：じゃあ、生物多様性とからめる動物関係は私が担当しますね。その授業のどこかでまた外部のおもしろい人を呼びたいです。
- 北原**：人選は生物の細野さんと現文の高橋さんとも相談しようか。
- 菅家**：ムスリムの方の講演会の授業、ふり返っておきますか？
- 北原**：生徒に英語で感想を言わせたら、「イスラムに対する見方が変わった」「英語を頑張らなきゃと思った」の二つが多かったね。
- 夏目**：帰国生からは「質問と回答がズレていることもあった、英語で質疑応答をやるのに無理がないか」という意見もありました。
- 大平**：そのズレを、自分たちでネゴシエイトして埋めてほしいのに。
- 北原**：そこなんだよ。いくら英語ができて、自分と英語レベルが違う人と付き合えないようじゃ、国際人になれないからね。
- 菅家**：質問するサイドの心がまえ、最初に伝えとけばよかったかな。
- 大平**：ノンネイティブの人と付き合うときの態度ですね。大事。
- 北原**：次はそうしよう。いい経験ができたよ。前回の地理、今回の世界史との連携で、知識がすぐ生きることも実体験できたし。
- 菅家**：いろいろ学んだことが英語に集結する感じ、ありましたよね。



1 ミックスクラスとレベル別クラスを 目的に合わせたクラス編成で使い分ける

2年生の授業は1テーマごとに、前半5時間は、ワークやディベートを英語力の異なる生徒が集うミックスクラスで実施(生徒同士の学び合いの刺激を重視)。後半5時間は、生徒が希望したレベル別クラスに分かれ、例えば基礎クラスは前半5時間の内容をていねいにふり返る(レベルに応じたフォロー重視)。

2 ほかの先生を巻き込みたいときは 話を聴いて思いを返して広くシェアする

菅家先生は、頼りたい先生の話をもまず聴くことが大事だと考えている。その際は、そうして学べたことを自分が取り込むだけでなく、聴いたアイデアに自分の提案を返すことや、アイデアをほかの先生にシェアすることも目指す。そこで化学反応が起きると、みんなで取り組める活動になるからだ。

3 教材づくりは分担しながら自分でも調べて 自らが体感した楽しさや驚きを届ける

教材づくりは分担して行いが、扱うテーマのホットな話題には全員がアンテナを張る。担当者を支援できるし、菅家先生が思うのは、そうして自分で考えて感じたことが多いほど、授業で生徒とのやり取りを楽しめるからだ。「先生自身が授業で話すことにすごく興味をもっている」とは生徒の談。

4 未来を想起させる問いかけて授業を締めて この先の社会とのかかわりを考えてもらう

授業で実社会の話題を扱ったあと、菅家先生は「こんな選択もある」「この問題は どうする?」と投げかけて授業を締める。刺さるときも刺さらないときもあるが、刺さった生徒は、意見を出してくれたり、調べはじめたりと、そのタネをもとにいろいろな方向に自分で芽を伸ばすようになるからだ。

授業ができるまで

未来を創る授業を目指すも 一人ではうまくいかなかった

菅家先生は、中学生のころから、人に物事を教えるのが大好きだったという。

「テスト勉強を早めに終わらせて、友達に教えて、代わりにジュースやおかしをもらっていました。その報酬も魅力でしたが(笑)、友達が『あ、そうか!』とよろこんでくれるのがうれしかったです」

進路選択では、一度はコンサルティングファームへの就職が内定。そこから思い直して、教師になったという。

「大学院生時代にこの高校で非常勤講師をさせてもらったら、すごく楽しくて。教師の仕事には、保守的で何か社会から取り残されていくイメージをもっていたのですが、本質は、社会を変えてこれからの未来を創っていく仕事なんだ、と感じました。だから教師の道を選びました」

晴れて教師になると、生徒と未来を創るような授業をしようと意気込んだ。でも、「アイデアは浮かぶけれど、授業をする力が全然足りなかった」という。

「例えば、生徒が自由に意見を言い合い、批判し合うのも恐れない空気を作りたいのに、うまくできなかつたり。5年経った今も、知識も経験も足りていません」

そこで菅家先生は、まずはいろいろな先生の話聴いて学ぶことにした。する

と、そのうちに「自分一人で行うとより、まわりの先生も巻き込んだほうが早いじゃないか」という思いが強まった。「いいアイデアだと思えたことでも、ほかの先生と一緒にそれを叩けば、そこにはまだまだ、良くなる余地があるんですよ。こんな視点やこんな質問はどうか、とみんなでどんどんみがいしていきます」

多くの先生から聴いて学び 先生同士をつなげる役目も

巻き込む際に、菅家先生がかぎになるとみているのが、期せずして実践してきた「聴くことから始める」姿勢だ。

「先生方って、みんなおもしろいことをやっているのに、各自の取り組みで終わっちゃうことがけっこうあるんですね。相手に関心を示さず、自分への協力だけお願いしても、仲間にはなってもらえません。だから、まずは先生方がやってきたことに耳を傾け、そこに自分がやりたいことをブレンドできないか考えます。その結果、ある先生と化学反応を起こせたら、今度はそこに別の先生のやりたいことも引き込めないか、さらに話を聴いてまわり、つながりをどんどん広げます。そんな感じなので、私には純粹に自分だけで作った授業はほとんどありません。ただ、そうして大勢の先生が同じ方向を向けたときの求心力というのは、すごいな、と感じています。先生同士のつながりを作っていく、ハブのような存在になりたいです」

生徒はこう変わる

もどかしさと「わかった」が
生徒のハートに火をつける

先生たちで力を合わせて作った授業は

生徒の意識を変えつつある。以前までは「これって試験に出ますか？」と訊いてきて、成績や受験にかかわるものだけに意欲を燃やす生徒が少なからずいた。けれども、実社会や他教科とつなげた授業では、そのお決まりの質問が出ないのだ。文法基礎などの授業でも「エッセイをきちんと書きたいから頑張る」と、生徒が自分なりの動機を言葉にするようになった。受験のほかにも勉強のモチベーションを得たことが、受験にも良い効果を生むことを、菅家先生たちは期待している。

また、授業で実社会の最新トピックスに
ふれ、Social Justiceで社会問題と向き



Social Justiceの実行で、生徒には「高校でこれだけできたのだから、実社会でもトライできる」と感じてほしいと菅家先生は思っている。

INTERVIEW

英語で学ぶ「現在進行中」の社会課題に 世界史の授業で「本質」「視点」をもたらす

英語科の先生方は、「現在進行中」の世界のトピックスを、英語の授業で意識的に追いかけてくださっています。生徒がこの世界に関心をもつタネを蒔き続けてくれているわけで、その効果は、世界史を学ぶ生徒の姿勢にもはっきりと表れています。

その英語の授業との相乗効果を高められるよう、世界史の授業では「本質」や「視点」を伝えることを強く意識しています。例えば、イスラム教徒である私の友人は「イスラムはひとつの社会システムだ」と言っています。システムとして機能していて、その宗教をベースに国家や社会が構築される。だから政治と宗教が分離することはありえない。そもそも「政教分離」の考え方は西ヨーロッパの視点であり、それはひとつのものの見方にすぎないのです。こうした本質や視点を理解したうえで、現在進行中のニュースにふれると、また発見がありますよね。英語科や他教科とも連携しながら、私は歴史屋の立場からタネを蒔き続けて、生徒たちの発芽を促していきたいです。



世界史
遠藤吉宗先生

合うなかで、生徒の「ニュースへの感度」が高まっているのを感じている。出版社襲撃事件についてディベートしたあと、菅家先生が「こういう可能性もあるよね」と投げかけると、授業終了後に何人もの生徒がやってきて「こうですよ」「いや、そうじゃないでしょ」と話しにきたという。

「授業のあとも議論が続くようなときは、うれしいですね。熱が冷めやらない。生徒はハートに火がつくと、それだけでどんどん進んでいくんですよ。だからそこにはすぐフオカスします。生徒が「もつと知りたい！」というもどかしさを感じるとか。「言えた！」「聞き取れた！」「わかった！」という達成感を手にするとか。心を動かす授業をしていきたいです」

自分の思いを、講師にも届けることを前に英語でシートに書いた。3名の生徒の記述の訳文を紹介したい。

「過激派のせいで、イスラム教徒には自分たちとは異なる思想や信念があると感じていたが、この講演で、私たちがやほかの宗教を信じる人々と同じなのだと思いつかされた。それが今日学んだ一番大きなことだった」

「『知は力なり』だと改めて思った。書籍を読むなどして、もっとイスラムのことを学びたいと思う」

「どんな立場の人にも思いやりを忘れず、偏見をもたないような女性になりたいと思った。だからこそ外国語をしっかりと勉強して、たくさんの人とコミュニケーションを取れるようになっていきたい」



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	グローバルイシューに関する知識 ・環境、貧困、人権、エネルギー、生物多様性など、地球規模の課題について、最新のトピックスを英語の授業を通して生徒が学ぶ 英語・日本語の語彙力 ・授業中の英語のライティングやリーディング、日本語での記述を通して、語彙力を高める	クリティカルシンキング ・異なるとらえ方をした英文の読み比べや、ロールプレイで、物事を批判的に考える力を養う 問題発見・解決能力 ・Social Justiceで社会問題の解決を考える 論理的発信力 ・議論やディベートで表現・発信力を高める	意見を表明するのを恐れない態度 相手の意見を引き出そうとする姿勢 ・ディスカッションやディベートで、間違いを恐れず、批判し合うことも恐れずに、英語で自分の考えを伝え、相手の意見も傾聴する 社会の一員として問題に向き合う ・Social Justiceなどで実際に社会とかわる
その力が将来にどう生きるか？	持続可能な社会の創造を目指す ・自分たちやその子孫をはじめ、さまざまな生物がこの地球で生きていくのを困難にするような問題に、自覚をもって立ち向かっていける 国際社会での意思疎通に役立つ ・世界あるいは日本国内で「国際人」として活動していくときに、英語・日本語でのコミュニケーションを円滑に行える	氾濫する情報を取捨選択できる ・情報を取捨選択し、客観的に物事を分析できる 地域や社会の担い手になれる ・自分の考えを発信し、社会に反映していける 意見の集約や調整がうまくなる ・多様な意見や複数の人の意見をまとめて、最善策を導き出すことができる	New Japaneseとして活躍できる ・和を重んじ、相手の意見を尊重するなど、日本人がもつ強みは維持したまま、英語への苦手意識やシャイな態度は払拭し、従来の日本人像を超えたNew Japaneseとして世界で活躍できる 自分たちで未来を創造していける ・自ら行動し、周囲に変革を起こすことで、社会を変えてこれからの未来を創っていける